

菊池武夫

ボストン大学ロースクール
初の日本人法学士出身地 岩手県盛岡市
生年 一八五四（嘉永七）年七月二十八日
没年 一九二二（明治四十五）年七月六日

一八七五（明治八）年七月十八日、一人の若者が横浜港からアメリカに向けて出帆した。文部省第一回官選貸費留学生の一行である。その中に、のちに英吉利法律学校の創設に参画し、二一年間の長きにわたって院長、学長を務めることとなる菊池武夫がいた。

このメンバーには、菊池のほか法学関係では、日露戦争後の一九〇五年日本全権としてロシアとの間でポーツマス条約の調印に心血を注ぐこととなる小村寿太郎や、鳩山由紀夫元首相の曾祖父にあたり一八九六年から翌年にかけて衆議院議長を務める三浦（鳩山）和夫、外務卿井上馨の秘書官として鹿鳴館時代に条約改正に力を尽くすこととなる齋藤修一郎がいた。彼らは、東京大学の前身である東京開成学校の同級生で、当時いずれも法学本科の三年生で、学年試験の結果、留学生に選抜されたのであった。

八月初旬、太平洋の大海原を無事に越えてサンフラン

記念して開催中であつたフィラデルフィア万国博覧会を見学し、また翌七七年の七月から九月にかけては、ニューハンブシャー州ノースウエイクフィールドを訪れ、同地で登山やハイキング、魚釣りなどに興じ、また各種のパティーに招待され数多くの人々と交流を深めていた様子が見えがえる。

留学から三三年経つた一九〇八年の晩秋、カロリン・ハンブリンという六十歳を過ぎた白髪のアメリカーナ女性が来日した。彼女は、菊池がしばしば訪れたノースウエイクフィールドのウェントワース家の親戚で、遠く故郷



菊池武夫

シスコに到着した一行は、そこから大陸横断鉄道に揺られながら一路東部へと向かった。ニューヨークで他のメンバーと別れた菊池、小村、齋藤の三人が目指すボストンにたどり着いたのは、八月十七日のことであつた。日本を離れてから一カ月の旅路であつた。

こうしてボストン入りした菊池は、齋藤とともにこの年の十月にボストン大学ロースクールに入学した。この法学校は、わずか三年前に設立されたばかりであつたが、当時、人種や男女を問わず広く門戸を開放していた。ちなみに、小村はハーバード大学のロースクールに入学している。

彼らは、この後約五年間の留学生生活を送ることになるが、その間勉学に励むだけでなく、夏休みには友人と連れ立って、時には寄宿先の家族などと一緒にバカンスを楽しんでいる。菊池の日記によれば、留学から一年経つた七六年の夏には、当時、アメリカ合衆国独立百周年を

を離れた日本人留学生に何くれとなく世話をしてくれた恩人であつた。再会を喜んだ菊池は祝宴を張ると共に、自邸に招いて心を尽くし、菊池夫人が富士や日光といった名勝を案内したという。

ハンブリン夫人の思い出話によれば、留学当初の菊池は「食堂に行く」という言葉を「外に行く」と聞き違えたそうであるが、留学中の日々の研鑽と社交的な交流に努め、上達したという。

監督官として菊池らに同行した目賀田種太郎の報告書によれば、一八七六年六月に行われた私犯法や刑法など六科目の試験で優秀な成績を修めた菊池は、さらに翌年六月には一三科目の試験に合格して、めでたくバチエラー・オブ・ロー（法学士）の称号を得た。二十三歳のことであつた。この菊池の法学士号の獲得は、ボストン大学ロースクールにおける日本人初の快挙で、それは今もロースクールの歴史の一頁を飾っているのである。